〈都市的なるもの〉のマテリアルな位相

――Assemblage アプローチの経験的/方法論的/存在論的な受容をめぐって――

○日本学術振興会　森　啓輔
愛知大学　植田剛史
NPO サーベイ・文京学院大学ほか　岩舘　豊

１　報告の目的

社会の近代性を鋭く体現する〈都市的なるもの〉は、それゆえ、社会学がその創成期より焦点化してきた研究対象であった。だが、その〈都市的なるもの〉においてマテリアルなものがもつ独自の位相は、都市空間が人工的建造物から自然物に至る多種多様なモノから構成されることの自明性ゆえに、むしろ社会学において見落とされてきた。そこでは、〈都市的なるもの〉を構成するモノは、ヒトが操作する対象であることを前提として、都市的な社会/空間においてその配分や分配が争点化する資源として扱われ、あるいは都市的な社会/空間を規定する外在的な条件として分析・記述の与件とされてきた。

しかし、たとえば東日本大震災下の〈東京〉で経験された出来事の数々は、〈都市的なるもの〉に体現される社会の近代性が、実はヒトとモノとの複雑な連接のうえに成立し、そこにおけるモノの働きとモノをめぐって作動する力学には、もっぱらヒトの世界に焦点化する社会学的アプローチでは十分に迫りえないことを突きつけた。では、いかなる理論的視座がこうした位相に切り込むことを可能にするのか。本報告の目的は、都市的な社会/空間にアプローチする諸理論の対立構図を明らかにすることを通して、〈都市的なるもの〉のマテリアルな位相とそこでモノをめぐって作動する力学に迫りうるものへと既存の社会理論を拡張するための方途について検討することにある。

２　方法

以上の目的に照らし本報告は、(1) 東日本大震災下の〈東京〉で経験された〈都市的なるもの〉の自明性の「不安定化」と「再安定化」のプロセスを具体的な都市的インフラストラクチュア（たとえば水道システム）に即して辿ることで、迫るべき〈都市的なるもの〉のマテリアルな位相を示し、(2) Actor Network Theory の都市研究への応用を試みる Assemblage アプローチとそれを批判する政治経済学的アプローチとの理論的対立構図について、*City* 誌上で展開された両者の論争も含めて検討しつつ明らかにし、非人間中心主義的な発想を社会理論に組み込む方途を考察する。

３　結果と結論

〈都市的なるもの〉の「不安定化」と「再安定化」のプロセスを辿ることで明らかになったのは、必ずしもヒトの意図どおりには制御しきれないモノの特性と、そうしたモノとヒトの集合体（Assemblage）の統治をめぐる権力作動のダイナミクスであり、都市研究に非人間中心主義的発想を組み込むことの切実さもここにある。〈都市的なるもの〉をヒト-モノの集合体として捉える Assemblage アプローチは、こうしたマテリアルな位相に迫るうえで有効な理論的視座を提供するが、同時に次の点が課題として浮上する。第 1 に、ヒト-モノの集合体への焦点化は、それをめぐる権力作動やマクロな構造の再生産プロセスの記述/分析へと敷衍可能な形で設計されなければ、社会の近代性に迫るうえでの認識利得は損なわれる。第 2 に、ただしその場合ヒト-モノの集合体を、経験的/方法論的/存在論的レベルのいずれにおいて組み込むのか、社会理論には鋭く問われる。非人間中心主義的な発想を社会理論に実装するには、こうした課題の整合的な整理が課題となるが、それはあくまで経験的研究との往復のなかで試みられる必要がある。今後の課題としたい。